

「観念」という装置

——ジョン・ロックとステイリングフリートの論争から——

田村 均

1 はじめに

「観念 (idea)」という語は、デカルトの影響の下、西洋の十七、十八世紀の哲学の中心にあった。わけても、ジョン・ロックは、「観念」という語をみずからの哲学の中心に置いた代表的な哲学者の一人である。ロックは、生得原理や生得観念をしりぞけると、人は生まれつきの能力 (natural faculties) を用いることによって、生得の刻印 (innate impressions) の助けなどなしに知識に到達できることを示そう、と述べ (Essay I-2-11) (一)、理性的推論と知識に関わる素材のすべては経験から得られる観念であると主張した (Essay II-1-2)。人は、経験から得られる観念を通じて、神、自然、道徳について、知るべきことはみな知り得るとロ

ックは考えたのである。

しかし、「観念」という語を使用することは、それを通じて得られる知の地位をどう考えるかという非常に基本的な問題を派生させる。理性的原理に訴えない経験主義は、実在的世界と観念との対応の裏付けを与えがたいから、相対主義に衰弱する可能性を常に持っている。ロックは、「観念」という語の使用によって、かえって自ら目指した知識への道の開拓に失敗する可能性があるわけである。では、なぜ「観念」という語をロックはあえて採用したのだろうか。これが、小論の基本的問題である。

以下では、ロックの『人間知性論』に対するステイリングフリートの批判を取り上げる。ロックの観念の理論に対してステイリングフリートが放った批判はきわめて鋭いものであ

った。その要点を概括して提示し、ロックとステイリングフリートとの論点を比較対照し、彼らの対立がどこにあったかを探る。

最終的には、経験主義における「観念」は、ロック自身がそう思っているように人を知識へと連れて行く媒介として意識されていたにもかかわらず、じつは、人を知識から切り離す装置としてむしろ積極的にならざるを得た、ということを示唆したい。ロックは懐疑論者ではない。にもかかわらず、人を知識からへだてることが彼には必要だったのである。

2 ステイリングフリートの時代的位置

ウスターの主教、エドワード・ステイリングフリート (Edward Stillingfleet, Bishop of Worcester, 1635 - 1699) は、現在ではロックを批判した人物として名前が残るだけだが、じつは十七世紀後半のイングランドを代表する知識人の一人であった(2)。彼は、ロックの『人間知性論』が正しいキリスト教の信仰を、なかでも三位一体の教義を危うくするような知識の理論を立てていると見なし、これに対する批判を行なった(3)。

ステイリングフリート自身は英国教会の広教主義派 (Broad Inducian) に属し、 Boyle や ニュートンの新しい自然学を神の摂理に場所を空けておく正しい自然哲学として肯定的に受け入れる立場をとっていた(4)。 Boyle や ニュートンと

ロックとは、周知のとおり、学問上同じ陣営に属していたから、ステイリングフリートとロックも本来なら対立すべき間柄ではなかった。ロックにとつてステイリングフリートからの批判は衝撃であつたらしく、『人間知性論』に対するこれ以外の数多くの批判には答えなかつたのに対し、ステイリングフリートにだけは礼儀正しい長文の応答を試みた(5)。

批判と応答は、多くの論点を含み、話題も神学、哲学から古典学、語源学に到るまでの多岐にわたる。ステイリングフリートは、基本的に、ロックの「観念の道」の哲学を理神論者ジョン・トールランドの先行者であると見立て、かつ、神の摂理に正しく場を与えないデカルトやホッブズの継承も見受けられるとして、手厳しく批判した。その批判は、宗教上の闘争に由来しているとはいえ、決してすべてが宗派的な論難(6)であるわけではなかつた。

3 ステイリングフリートのロック批判——基体「実体」(7)

ステイリングフリートの基本的目標は、三位一体の教義を理性 (reason) (8) の名のもとにしりぞける議論を反駁することである。反駁の対象になつたのは(9)、三位一体は明晰判明な観念として把握できず、この意味で理性を越える神秘であり、このようなものを受け入れてしまえば、およそどのような不条理でも同じく受け入れることになる、という主張

であった (cf. TCL. I - 231~233)。

「」の説は、確実性 (certainty) を備えているとわれわれが主張できることについてはすべて、心の中に、明晰判明な観念が有るのでなくてはならず、この確実性に到達する唯一の道は観念の相互比較である、と想定している (TCL. I - 232)。」

してみれば、ロックが標的となる理由は十分あったのである。

ステイリングフリートの考えでは、明晰判明な観念が得られなくても確実なことはある。その筆頭は三位一体なる神の存在であり、また基体 = 実体の存在である。基体 = 実体観念についてのステイリングフリートの議論はロックの弱点を見事についている。ロックは感覚と内省が観念の源泉であると、基体の観念はこの二源泉に由来しておらず、諸性質の支えという混乱した不明瞭な観念にすぎない、と主張した (Essay, II - 23 - 1 ff.)。だが、事物について考えるときに、様態や属性が自存するとは考えられないことをロックも認めるのだから (Essay, II - 23 - 4)、「ステイリングフリートに言わせれば「基体 = 実体の理性的観念 (the rational idea) はわれわれの心の中の最初のそしてもっとも自然な観念である (TCL. I - 236)」ことになる。かくして、われわれは理性推理することによって、もっとも根源的な存在者である基体 = 実体を見いだすのだから、感覚と内省の観念によらずに

確実なことがまさにここにあり。

これに加えて、感覚と内省が理性推理の基礎のすべてであるとするなら、じつは、物体と精神という存在者の基本的区分に到ることさえできない。ロックは、内省によってわれわれは自らのうちに精神実体を見いだすことができると言っているが (Essay, II - 25 - 5)、「しかし、驚くべきことに、神が物質に思考する力を与えなかったかどうかは、啓示を待たずに観念を見つめることだけでは決められないと言っている (Essay, IV - 3 - 6)。「これは、思考体験への内省だけでは、つまり、内省の観念からだけでは、「われわれが自らの中に精神実体を持つか持たぬか確実性は得られない (TCL. I - 242)」と言うに等しい。

「だから、この観念の道において、人が到達できるのは、ただかたか、物事はそうであるかもしれない、そうではないかもしれない、その上、そうなのかそうでないのか観念に従って判断することはできない、ということなのである (TCL. I - 243)。」

すなわち、観念の道は懐疑論への道である (cf. TCL. II - 125f.)。

4 ステイリングフリートのロック批判——神の存在

一方、神の存在に関してステイリングフリートが批判した

のは、次の二つのことである。第一に、彼はまず、デカルトを槍玉に挙げる。デカルトは、自己の存在の確実性から始めて、この確実性が観念の明証的な知覚に基づくことをもって明晰判明の規則を見いだし、かくして明晰判明な観念から存在に到る、という説を立てた、とステイリングフリートは理解する。だが、自己の確実性は、自己の存在を懷疑するといふまきその行為に存しており、知覚された観念の明晰性には存しない。だから、観念の明晰性を、自己以外についても實在性の原理としたのは不当な拡張である。ここでロックに目を転ずると、じつはロックは、いわゆる神の存在論的証明をまづいやり方だと考え、採用していない。ということはずまり、観念から存在への道は採用できないものなのである(TCL. I - 247ff., II - 84ff., cf. Essay, IV - 10 - 7)。

第二に、ロックが採ったのは、自己の存在の確実性から始め、すべてのものは原因を持つという原理に訴えて、神の存在を証明する道の方である。そこで行われているのは、明らかに理性による論証であって、明晰判明な観念の知覚などではない(TCL. I - 250ff., II - 94ff.)。

5 ステイリングフリートのロック批判——事物の分類と認識

ステイリングフリートの場合、神や事物の存在が理性の力によって経験に先だって打ち立てられるのだから、個々の事

物の認識の成り立ちも、ロックとはおおいに異ならざるを得ない。個々の事物の認識は、そのものが何であるかという自然本性(nature)の認識である。ステイリングフリートは'nature'を、事物の本質的特性の意味にも、特性の存する事物自体の意味にも用いる。よって'nature'と'substance'は同義となり(cf. TCL. I - 252-3) '基体=実体は明らかにそのもの自体であるのだから、ものが何であるかということとはわれわれの経験を待たずに確定している、という考え方になる。これこそ、ロックが、『人間知性論』第三巻の言語論において批判した考え方であった。

だが、ステイリングフリートはかえってロックの立場の不備をつく。ロックは、単純観念が真にして十全であること、事物の本質には、唯名的本質とは別に、事物の内的構造と見なされる實在の本質もあるということとを認めている。ならば、少なくとも、これら諸性質についての真で十全な単純観念から、事物の實在の本質が或る程度は十分確実に得られるのではないか。諸性質の由来する事物の内部構造もここまでならば知られ得るだろうし、また、諸性質が内部構造から産出される仕方が分からなくても、そのような本質が在るといふことは知られ得る。

それゆえ、「われわれに知られ得るようなものとしての事物の本質は、その事物において實在性を持つ。というのは、それは、事物の自然本性の構成(natural constitution)に

基礎を置いているのだから (TCL. I - 257)。」

「一般観念は、諸条件の捨象という仕方、たんなる心の働きによって、単純観念から作られるのではない。事物の真の自然本性に関する考察と理性推理から作られる。……事物の唯名的本質がどれほど変わろうとも、実在的で共通の本質、すなわち、種の自然本性は、そのことによって変わりはないのである。……自然本性は、人の観念に依存しているのではない。諸々の存在を創造した神の意志に基づいているのである (TCL. I - 259)。」

このように見てくると、「観念の道」を採用しなかったステイリングフリートの方が、ロックよりも、はるかに明快な哲学をもっていることが分かる。理性推理によって存在を先取することができるのだから、これに加えて、神という、いわば無限大の説明力を持った理論の力によって、われわれの経験する事柄はすべて、あるべくしてそうあるという必然性の中におかれるのである⁽¹⁹⁾。

6 ロックの応答——方法論について

ステイリングフリートの以上のような批判に、ロックはどう答えるだろうか。ステイリングフリートの提出した論点のうち、われわれに興味深いのは、分類と認識の問題である。

というのも、ロックにはもともと、神の存在はもとより、個個の事物の存在を疑うような懐疑的姿勢はない。だから、ス

テイリングフリートとの間の対立は、個々の事物についての経験がそのまま真なる学問的認識として通用するのかどうか、というところに集中して現れることになる。ただしこの点を吟味する前に、ロックが、「観念の道」に対する方法論上の批判にどう応対したかを見ておくことにする。

ロックは、対象の観念と対象の存在とを分けて考えなければならぬことをはっきり述べている。実体の観念が、諸性質の支えという不明瞭な観念であるとしても、実体の存在 (the being) が、このゆえに揺らぐわけではない⁽²⁰⁾。そもそも、自然の中に存在していても、われわれが観念をまったく持っていない事物がたくさん在るのは明らかである (Works, vol. 4, p. 18 (i), cf. Essay I - 4 - 9)。

一方、神に関しては、

「God」という音が表している複雑観念が、……この観念に応じた一つの存在者の現実存在 (the real existence of a being) を証明するなどということはない。それは、誰かの心の中の何かの観念が、それに応ずる何かの現実存在を証明したりしないのと同じである。しかし、私の思うところでは、だからといって、何かほかの観念があつて、これらによって神の存在が証明されるということにならないわけではない (Works, vol. 4, p. 55 (i))。」

よって、観念を持つということは、対象が存在するということの必要条件でも十分条件でもない⁽²¹⁾。「観念の道」は明

断判明な観念から存在への一直線の道ではない。神観念の生得性をしりぞけたときに、ロックは、すぐさま続けて、神観念は理性の光に適つていて、人の知識のどんな部分からでも自然に導き出すことができる、と述べていた (Essay I-4-9ff.)。無人島に置き去りにされた子供達でも、「事物の原因と構造についての考察から (Essay I-4-11) 神を見いだすであろう。観念から存在へ直接の通路があるとは限らないから、たとえ神観念が存在証明に役立たないとしても、」そのことが観念の道 (the way of ideas) への反論となるわけではない (Works, vol. 4, p. 55 (i)) のである。

また、確実性があたかも明晰判明な観念に存するとのみロックが言ったかのように述べるステイリングフリートの捉え方は、不正確である。確実性は「観念の一致不一致の知覚に置かれるのであって、私の意見では、単純であれ複雑であれ単独の観念に置くことはできな」 (Works, vol. 4, p. 57 (ii))。確実性は、観念にも、観念を対象とする理性の働きにも関わる。「だから、確実性は、観念と、適切かつ健全な理性との、両方に置かれる (Works, vol. 4, p. 59 (ii))」。理性なしの観念が確実性をもたらしたり、観念なしに理性が働いたりすることはない。両者をわけるステイリングフリートの論法が正しくないのである⁽¹³⁾。

では、精神実体の存在が内省の観念からは確立できない、というステイリングフリートの批判にはどう答えられるだろうか。

ロックによれば、基体の観念に、思考の様態、つまり、思考する能力がつけ加わったものが精神実体である。ほかの何らかの様態が伴うかどうかは当面関係がない。だから、空間占拠 (solidity) という物質の様態を精神実体が併せ持つかどうかは考慮の外である。精神実体は思考する実体である。それが非物質的実体であることの確率は高いが、自分はそのであると証明しなかつたし、出来もしないだろう (Works, vol. 4, p. 29 (i), p. 37 (i))。

「それ〔観念の道〕は、私が確実なものとして示したことに ついては、確実性へとわれわれを連れて行ってくれる道である。私は、それを、確実性へとわれわれが決して達し得ないところで、われわれを確実性へと連れて行ってくれるような道だと考えたことなどはな」 (Works, vol. 4, p. 39 (ii))。ロックは、ステイリングフリートのように理性推理によって存在を先取するとは言わないが、日常的経験の領域では実在論の傾向を強く持っている⁽¹⁴⁾。ロックは、眼前で燃えている蠟燭の炎の存在を疑う懐疑家は、そこに指を突っ込んでみればよい、と勧める。そうすれば確実に苦痛を感じるだろう。それで十分である⁽¹⁵⁾。「この証拠はわれわれの望み得る限りの重みを持っている。というのも、これは、快と苦、つまりは幸福と不幸と同じだけ、われわれに確実なのである。そして、幸福と不幸を越えたところには、それを知ったり、それになつたりしたいような関心事をわれわれは持つていな

い (Essay IV - 11 - 8)。」日常的な対象の存在を確実と考
える点では、両者には似たところがある。二人の違いを明ら
かにするには、さらに事物の分類の問題に進まねばならない。

7 ロック対ステイリングフリート——事物の分類と 認識

ステイリングフリートは、自然本性とは、事物の本質的特
性を指していると同時に個々の事物自体も指しており、従っ
て、特性の基体 (the subject of powers and properties) で
もある、と言っていた。このような考え方は、混乱と不明瞭
をもたらさずにはいない。

一方で、自然本性は、別個の諸個体の中に、「特定の存続
の様式をともなった共通の自然本性として (TCL. I -
253)」在る。だから、「ピーターの中の人間の自然本性は、
ジェイムズやジョンの中の、その同じ自然本性とは違ってい
る。さもないと、これら三人は同じ自然本性を持つばかりで
なく、一個の人格¹⁶でもあることになるだろう (ibid.)」。
・ 他方、抽象的に考えれば、「自然本性は、異なった個体の
中にあり得るが、それ自身は一にして同じ自然本性であり続
ける。このことは、さもないとすべての個体がそれぞれ別個
の種になってしまう、という明白な理由からあきらかである
(TCL. I - 254)。」

ロックはこの箇所にも何度か立ち戻って、ステイリングフリ

ートの言うことが理解できないと訴えている。同じ自然本性
がピーターにもジョンにも在るのか、ジョンの自然本性とピ
ーターの自然本性は違うのか、どちらかであるはずであり、
同一であってかつ異なるというのは全然分らないと言う
(Works, vol. 4, p. 74 (i); cf. p. 157 (ii); ff. p. 430 (iii); ff.)。
われわれから見ても、この点での混乱は明々白々にステイリ
ングフリートの方にある。個体がそれぞれまさにその個体と
してある、という形而上学的自己同一性と、個体がいろいろ
な特性を備えたものとして知られる、という経験的事実と、
いくつかの特性の組によって諸個体を一括した種が規定され
る、という事物分類の条件とが、すべて自然本性という一語
の中に詰め込まれているので、わけの分からない表現になっ
てしまう。

ところが、ステイリングフリートの考えでは、この三つの
ことの分離こそが許しがたいのである。自己同一的なもの
としての基体・実体の存在は、理性推理によって確実である。
この存在は神の創造に根拠を持つ。すなわち、いくつかの基
体・実体が本質的特性に関して一致し、種をなすように、神
がそれらを創造した。そこで、事物はしかじかの特性を持つ
というようにわれわれに知られ、かつ本質的特性は基体・実
体の中に真にある (cf. TCL. II - 108ff.)。ロックのように、
種を人間が経験を通じて獲得する抽象一般観念に基づかせる
などということは、真の理性の道を理解しないやり方である。

「すべての別個な存在者の種は、本質的特性によつて區別される。人の本質的特性は理性、言語能力その他にある。これらの特性は、實在的実体 (a real substance) なしに、それらだけで存続することはできない。ゆえに、これらの諸特性が見いだされるところでは、それらを持つものは實在的で実体的な人 (real and substantial men) でなければならぬ……。これら一般原理 (maxims) は役に立たないどころではない。なぜなら、われわれが探求しているのは、理性の確実性であつて、たんなる知覚の確実性ではないのであるから (TCL. III - 108~109)。」

「あなたの観念による確実性への道は、まったく新しい道である。そこでは、われわれは、一般原理 (general principles)、基準、前提と帰結、三段論法による証明法、といった一切を持たない。なのに、ただ観念の助けだけで確実性に達する良い道があると聞かされるのだ (TCL. III - 120)。」かくして、ステイリングフリートが理性の働きと考えているのはアリストテレス・スコラの伝統にたつ論証である。感覚経験が知識の基礎であることは十分に認められるが (TCL. II - 23)、それもこれも正しい存在の確立が先行してこそ成り立つ。

これに対し、ロックの唯名的本質による自然の事物の分類理論の説くところでは、われわれは、感覚から得る複数の単純観念を経験の教えるところに従つて束ね合わせ、こうして

作る抽象一般観念を種を形成する内包的規定 (唯名的本質) として立て、これに名前を結び付けて、種の種類の基準とするのである (cf. Essay III, chap. 6)。かくして分類する人の経験に相対化されてしか種は決まらない。自然の事物が存在するということがいくら確実でも、感覚の単純観念と物体の微粒子構造の結びつきは明らかでないから、實在的な種を確立することはできない (17)。

しかし、ロックは神による創造を認めているから、この観点からは自然には確定した種があることになる (cf. Essay III - 6 - 36)。そのうえ、感覚経験は基本的に信頼されている。すると、単純観念が真にして十全であるなら、それを通じて事物の中する分類ができるはずではないか、というステイリングフリートの批判は、正しくロックの説の不備をついていることになる。ロックは、たとえ相対的な分類しか人間にはできないとしても、生きる上での利益 (advantage) や喜びをそこから引き出すことはできる、という弁明を試みるが (Works, vol. 4, p. 76 (1) f)、利益が問題なのではなく自然本性の探求が問題なのだ、とステイリングフリートは切り返す (TCL. II - 115)。自然種の確定性を認め、日常的感覚経験の信憑性を認めているながら、なお、ロックが、事物が自然本性において何であるかの認識は根本的に人に相対的でしかない、という主張をあえて立てた理由はどこにあるのだろうか。

おそらく、ロックが親しく知っていて、ステイリングフリートには想像もつかなかったのは、次のような体験である。

「一つの種に分類され、一つの共通名によって呼ばれ、それゆえ一つの種の物であると受け取られている個物の多くが、それにもかかわらず、その实在の構造に基づいて持つ性質においてはずいぶんと異なっていて、そこには種的に違ふとされている物との間ほどの相違が有るのである。このことは、自然の物体を扱うすべての人の容易に観察できることであり、特に化学者は、硫黄やアンチモンや礬類 (vitriol) の一片において、〔同じ名前で呼ばれる〕他の一片に見いだされるのと同じの性質を求めて無駄に終わる経験をするとき、しばしば、つくづくこのことを納得するのである。硫黄その他は、それぞれ、同一の種であり、同一の唯名的本質を持ち、同一の名前で呼ばれている物体ではあるわけだが、厳密なやり方で調べると、互にたいへん違った性質を現すので、とても入念な化学者でさえその期待や骨折りの裏をかかれるほどなのである (Essay III - 6 - 8)。」

ロックは、この箇所で、じつにこんがらかったことを述べている。自然の中に確定した種があるということを前提して、人の行なっているのはそれに合わせた分類では決してないと言ひ、化学者の失敗の体験を、自然の事物の測りがたさの証拠として挙げている。だが、われわれの目から見ると、化学者はまさにこのとき事物の实在性に触れているのである。し

かし、ロックはこの点には目を向けようとしなかった。

この時代は、化学が徐々に錬金術から離脱して近代科学の枠内に入り始めた時代だった。われわれは、このことを、いわば追体験するよう努めなければならない。この箇所で硫黄と呼ばれているものには、たぶん雑多な硫化物がみな入っている。分類上どんな条件が大事なのか誰にも分からないから、ロバート・ボイルのような条件が大事なのか誰にも分からないから、化鉄とを識別し損ね、同一の鉄の礬 (vitriol of iron) だと見てしまっていた。鉄のやすり屑に礬類の液 (oil of vitriol 硫酸) を注いで適切な処置をすると鉄の礬が得られる、一方、塩の精 (spirit of salt 塩酸) と鉄とからも同じ物が得られると言っている⁽¹⁸⁾。実験素材が違っていることは分かっているのに、反応生成物の分類にはそのことが関与しないと見られている。あるいは、火の分解作用について、火は、密閉容器中の物質を加熱する場合と炉の中で同じ物質を燃やす場合とでは、同じ素材を異なつた要素に分解する、という点に注意を促している⁽¹⁹⁾。これは、実験結果に関与しうる複数の要因の重み付けについての微妙に的外れな注意のように思われる。おそらく、ことはたんに、上手に分類するための決定実験ができないとか、分類項目が部分的に不適切だとかいうような生易しい状況ではない。化学者は、実験的に有効な分類原理自体から、まだ絶望的に遠くにいるのである。

このような状況下では、自然の事物をどのような項目の下

に割り付けるかという基準は、どうしようもなく浮動してしまふだろう。それはすなわち、ある物が何であるかということが学知の水準で定まらない、ということである。神が世界を創造したこと、日常的感覺經驗が基本的に信頼できること、存在者は自己同一的であること、こういった宗教や日常生活や論理学の教えがどんなに本当であると確信できても、自然がどのように成り立っているのかということの基本原理が揺らいでいる以上、そういう教えはものの役に立たない。

他方、ステイリングフリートは、アリストテレス的な形而上学や自然学の原理を特に疑っていない。彼は旧来の原理の中に安住している。事物分類の基本原理の知がアリストテレス風の形であらかじめ受け入れられているから、形而上学的自己同一性と經驗的事実と自然の知識とが、自然本性という一語の中に詰め込まれ、その名の下に実在するものとして確立され得たのである。彼には、いわば、世界には何が存在するかが分かつてしまつていた。

ところが、ロツクはそうではなかった。事物分類の基本原理の知自体が揺らいでいたから、何が存在するかを決定することが少しもできなかった。ロツクは、科学的知識の水準においては、事物の実在性からのへだたりを強く意識せざるを得なかった。そのゆえに、事物と人間との間に、觀念という特別に考案された仕掛けを挟み込まなければならなかったのである。

ロツクにとつて觀念という認識論的な装置が必要だったのは、日常的な感覺經驗自体を説明するためではない。いわゆる感覺所与としての單純觀念は、一次性質であるうと二次性質であるうと等しく實在的と見て差し支えない (Essay II-30-2)。むしろ、たんなる日常的感覺經驗の水準を離れて、学問的手続きによつて探求される真實在を問題にするときに觀念という装置が必要となつたと考えられる。具体的な細部にわたつて自然の成り立ちに関する知識を与え得るいかなる体系もいまだ存在しなかつたから、人間は觀念という限定された対象領域を通じて實在の世界と交渉していると考えることに意義があつた。人間の認識の条件としてのこの限定を表現することこそ、觀念という用語でおそらくは意図されていることである。この意図からすれば、觀念が「心の中心」対象であるということすら思想史的な偶然のもたらしたものであると言つてよいかもしれない。

觀念は、一見、人と世界とをつなぐための媒介として導入されたかのように見える。そして、たしかにロツクの考えでは、觀念を通じるほかに、人は実在するものに到達する別の道を持たない。けれども、經驗論者としてのロツクが「觀念の道」を強固に主張し、決してそこから離れなかつたのは、觀念という装置が、人と實在の世界とを切り離すからなのである。すなわちそれは、何が存在するかということの決定を猶予する装置であつた。そして觀念という装置のこのような

働きこそ、ステイリングフリートが絶対に受け入れなかったことであった。「観念の道」は人を懐疑の状態に導くかもしれない。だから、ロックは次のように言うのである。

「私は、私自身の知性以外の、誰の知性のなかをのぞき込むこともできない」(Works, vol. 4, p. 139 (ii))。

「知識は、思考における心の直接的対象の一致不一致の知覚にのみ存している。私は、この対象を観念と呼ぶ(Works, vol. 4, p. 144 (ii))」。

8 むすび

こうして経験論的な観念説は、その出発点で、世界から人を切り離す装置であるというまさにそのことにおいて人を世界に結び付ける媒介でもある、という逆説的な両義性を背負うことになった。観念という装置のこの両義性が、ロックの哲学の、ひいては経験論の哲学の、骨格を決定することになったと思われる。

註

(1) ロックの『人間知性論』の引用および参照箇所は、オックスフォード版 (*An Essay concerning Human Understanding*, edited by P. H. Niddich, Oxford at the Clarendon Press, 1975) の巻一章一節の番号で示す。Essay I - 2 - 1 などのもものは、1巻2章1節のことである。なお、引用は基本的に拙訳であるが、岩波文庫版の大槻春彦訳を参照させていただいた。

(2) Richard Popkin, "The Philosophy of Bishop Stillingfleet" *Journal of the History of Philosophy*, vol. IX, July 1971, No. 3, pp. 303-319

(3) E. Stillingfleet, *A Discourse in Vindication of the Doctrine of the Trinity* (1697) chap. 10 など、その第一の巻の、ステイリングフリートの三つのロック批判をすべて E. Stillingfleet, *Three Criticisms of Locke*, 1987, Olms に復刻されている。以下引用はすべてこの復刻本による。TCL. I - 244 などであるのは、第一の批判の二四四ページを示す。

(4) Popkin, op. cit., p. 309 など。より詳しくは、マーガレット・ジェイコブ『ニエートン主義者とイギリス革命』中島秀人訳 学術書房 一九九〇 第一章。

(5) ロックからの三つの回答は『The Works of John Locke, vol. 4, 1823, London (repr. by Scientia, 1963)』にまとめられている。引用はこの書のページ付けを示す。p. 153 (ii) などであるのは、Works, vol. 4 の一五三ページであり、それは第二の答弁である、ということを示す。

(6) 現在のわれわれには宗派的な議論としか見えないのは、たとえば、三位一体は複雑な議論で擁護するが、全質変化 (transubstantiation) は理性の名においてしりぞける、といった主張である (TCL. I - 261-2, I - 290)。

(7) 基底 = 実体は 'substance' の訳語。主語的実体 (基底) と個々の種の「もの」としての実体とを、ロックは分けて考えたが、ステイリングフリートは分けない。基底 = 実体という奇妙な訳語を当てているのはそのためである。

(8) 'reason' の訳として、「理性」「理性推理」「理性推理する」など、適宜用いた。

(9) John Toland, *Christianity not Mysteries* が直接の論敵である。

(10) 信仰問題に戻ると、ステイリングフリートの判定では、「観念

の道」に沿う場合唯名的本質にまでしか到らないなら、自然の事物さえロックやトールランドにとってはまさに神秘となるだろう。それなのに、彼らは自然の事物に関しては、ある程度の経験可能性を認めている。信仰に関しては「観念の道」に従って神秘を捨てると言うなら、彼らの議論は首尾一貫しない (TCL. I - 262-272)。

「キリスト教の信仰の神秘を攻撃することにおいて、〈観念〉といった哲学の新しい言葉を、真には理解せずに使いたがる軽薄な輩ほど大胆な者どもはいない。〈観念〉はそういう輩のもったいぶった口ぶりに適していて、彼らとしては、〈類〉と〈種差〉とか、〈隠れた性質〉や〈美体形相〉といった言葉をもたして論議してもよかったはずなのだが、たんに流行に従っているだけのことなのである (TCL. I - 273)。」

(11) スティリングフリートは、主語的実体としての基体と個々の事物としての実体を分けず、ロックは分けるので、議論がかみ合わない。ロックは、日常出会う事物の存在は疑われないが、基体は「諸性質の支え」という想定でしかなく、事物のように存在者であるとは言えないと考えている (Works, vol. 4, p. 27 (ii))。スティリングフリートは、基体・実体はたんに「支え」ではなく、個物を個物たらしめている内的原理として究極の存在者だと考えている。

(12) 存在するということは知覚されているということである (esse *is percipi*)、というバークリーの原理とは鋭い対照をなす。

(13) スティリングフリートは三段論法の形式を理性的証明の根拠と見るが、ロックは観念間の一致不一致の直観を証明の根拠と見る、というところが大きく異なっている。

(14) ロックはスティリングフリートに、あなたの意見は自分の意見とそうは違わないように見える、と言っている (Works, vol. 4, p. 19 (ii))。

(15) ロックにおいては快苦への言及が存在論証の役を果たすという指摘は、かつて木曾好能氏からいただいた。

(16) 「人格 (person)」は、そのまま、三位一体の位格 (persona)

と同じ語である。そこで、この論点は、スティリングフリートにとっては非常に大事になる (cf. TCL. II - 106-103, 123)。

(17) 感覚の単純観念と事物の関係は、一次性質と二次性質の区別からんで解釈上複雑である。この点については次の拙論を参照していただきたい。「ジョン・ロックと微粒子説」井上庄七、小林道夫編著『自然観の展開と形而上学』所収、一九八八、紀伊国屋書店。

(18) cf. Robert Boyle, *The Origin of Forms and Qualities*, in *Selected Philosophical Papers of Robert Boyle*, ed. by M. A. Stewart, 1979, Manchester University Press, pp. 76-78

(19) cf. Robert Boyle, *The Sceptical Chymist*, 1911, Dent & Sons, p. 36

(たむらひとし・名古屋大学助教授)